

勤務医部会だより

夜明け前



幹事 味岡正純

(公立陶生病院 院長)

院長職を拝命してから、毎朝病院に着いて院長室に入ると、まず電子カルテを立ち上げて、前日からの救急外来の受診患者を確認し、次いで各病棟の込み具合を見るのがルーチンになった。受診患者の中の発熱患者の割合や救急車で搬送患者数、近隣のクリニックからの紹介患者数などに一喜一憂しながら過ごすのである。

時に、救急外来の受診患者の中に自分が外来で見ている患者の名前を見つけることがある。多くは慢性心不全でフォローしている高齢患者が、心不全の増悪で救急来院されているのであるが、時には全く予想もしなかった病態で受診されていることもある。

その日は、自分が外来で長く見てきた90歳代の女性患者のお名前を見つけた。20年以上前に心筋梗塞で急性期の治療を私が担当して以来通院してくださってきた方で、2週間前にいつもと変わらぬ様子で受診されたばかりであった。高齢だが気丈に一人暮らしをお続けになっていた方であるが、ショック状態で搬送されて救急外来で亡くなっていた。CTで、急性大動脈解離からの心タンポナーデであったと判明していた。この状況なら前兆もなく、防ぎようがなかったと自分を納得させたものの、なじみ深い患者をまたお一人失った寂しさは大きかった。

根治して通院不要となる疾患の少ない循環器内科領域の医師を一つの病院で長年続けていると、非常に多くの患者をフォローすることになる。今では80歳代や、中には90歳代の方も多くなってきた。そして、近年様々な疾患で亡くなられたり、当院の入院後に自宅に戻れず、施設入所されて通院をおやめになったりすることが目立ってきた。そのような時、少しは寂しくもあるが、その患者に対する自分の役割は終わったと、どこかホッとするとところもある。

循環器医として活動を開始したころには、カテテル片手に次々と患者の治療をこなすことに夢中に

なっていたものだが、今になって、この世代の患者を診てゆくのが自分の役割なのだと気付かされることが多くなった。医師に信頼を寄せてくれる患者がいて医療は成り立つ。患者にとって大事なポイントで、身を削って治療に専念する機会があったからこそ、患者も信頼を寄せてくれているのかもしれない。当時は自分の時間など、あまり考えたことも無かったし、家族に我慢してもらうことも多かった。医者になったからには、患者第一に行動することは当然と自分は考えていたし、自分だけでなく家族も考えてくれていたように思う。研修医の時には、さすがに先輩より先に帰らないように気を付けていたが、それ以降は自由に行動してきたし、上司から指示されたという記憶はほぼない。自分を必要とする患者がいて、今日こなすべき仕事が終わるまで病院にいただけなのである。患者のために時間を使うことが、ひいては自分を成長させてくれるのだと信じていたように思う。自分の頭の中では、医者は特別な存在だと思っていたのかもしれない。今になってみると、「夜明け前」のような考え方で生きてきたようにも見えるが、それもさほど悪くはなかったと思うのである。

働き方改革が進む今の世の中では、医師も一般の勤労者のような時間制約の中で治療に励むことが要求される。医師が効率よく職務をこなそうとしても、患者の病が効率よく治ってくれるとは限らない。人口減少が進み、医療を必要とする患者の総数が減少に転じるまでは、医師は非常に限られた勤務時間の中で治療を行い、患者の信頼を得てゆかねばならない。

ふと、今の医師は、これで本当に満足を感じることができるのだろうか、古い時代に生きた私のような医師は考えてしまう。自分は夜明け前でよかったなあと思うのである。